

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No. 22 [2003 / 2004 No. 5]

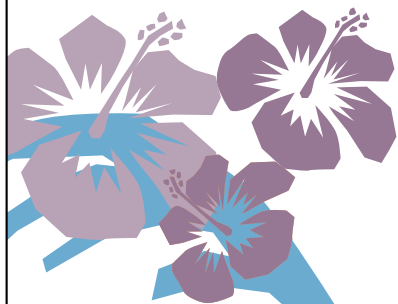
**JCRS**  
Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター



第10回国際サンゴ礁シンポジウム特集

**ICRS 特集号**



ご案内

日本サンゴ礁学会  
**第7回大会**

2004

**11.11** 木 - **11.14** 日

国土舘大学世田谷キャンパス

ご参加をお願いいたします！

詳細は、P.3をご覧ください。



ティドビット



ホボ ウォーターテンププロ



ホボ U12  
ステンレステンプロガー

## 水温計測はお任せ!

### 超ミニサイズ防水型温度計測ロガー

ロガー本体にはパソコンとの接続用ジャック穴や電子部品の露出部が一切なく完全密封構造となっていますので海水や湖水温の計測記録に最適です。

仕様	ホボ ウォーターテンププロ	ティドビット	ホボ U12 ステンレステンプロガー
モデル	H20-001	TBI32-05+37 TBI32-20+50	U12-015
耐圧深度(水中)	120m	300m	1500m
内蔵バッテリー寿命	5年(米国工場にて交換可)	5年(交換不可)	3年(米国工場にて交換可)
メモリー容量	21,580サンプル	32,520サンプル	43,000サンプル
計測範囲	水 中:0℃~+50℃ 空気中:-20℃~+70℃	-5℃~+37℃/ -20℃~+50℃	-40℃~+125℃
精度	±0.2℃ (0℃~+50℃)	±0.2℃/±0.5℃	±0.22℃ at 25℃
計測間隔設定	最短1秒~最長9時間(設定自由)	最短1秒~最長16時間(設定自由)	最短1秒~最長16時間(設定自由)
専用ソフト(別売)	Windows対応		
寸法(mm)/重量(g)	30φ×115mm/43g	30×40×16mm/22g	17.5φ×102mm/72g
バッテリー残量チェック	○	×	○
分解能	12bit	8bit	12bit
通信ポート	シリアル	シリアル	USB
単価(税込)	¥19,800	¥19,800	¥39,000

姉妹品  
気温、湿度、電圧、  
電流、照度、雨量、  
ウェザーステーション、  
その他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 **パシコ貿易株式会社**

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目15番8号

TEL:03-3946-5621(代) FAX:03-3946-5628

URL:<http://www.pacico.co.jp> E-mail:[sales@pacico.co.jp](mailto:sales@pacico.co.jp)



# 第7回大会

ご案内

## ご挨拶

このたび、日本サンゴ礁学会第7回大会を国土館大学地理・環境専攻で引き受けさせていただきますことになりました。

会場となります国土館大学世田谷キャンパスは、緑豊かな世田谷の真ん中に位置しております。皆様をお迎えする頃には、キャンパスのイチョウも色づき、清々しい空気の中、充実した討論の場を提供させていただけるものと思っております。

今年は、ICRSという大きなイベントがあり、その後に日本サンゴ礁学会の開催というスケジュールになりました。ICRS以降の日本サンゴ礁学会の大発展を期して、第7回大会へ多くの皆様の参加を心からお待ち申し上げております。

第7回大会 実行委員長 国土館大学文学部 地理・環境専攻主任 長谷川 均

開催期間

2004年11月11日(木)～  
2004年11月14日(日)

会場

大会・公開シンポジウム・懇親会  
国土館大学世田谷キャンパス

<http://www.kokushikan.ac.jp/kouhou/campusinfo/setagaya/>

東京都世田谷区世田谷 4-28-1  
Tel: 03-5481-5247 (長谷川研)

## 大会スケジュール

11月11日(木)

13:30～18:30 評議員会・各種委員会

11月12日(金)

12:30～13:30 受付

13:30～17:00 口頭発表

11月13日(土)

09:30～11:30 ポスター発表

13:00～16:00 口頭発表

16:30～17:30 総会&ポスター賞受賞発表

18:00～20:30 懇親会

11月14日(日)

09:30～12:00 口頭発表

13:30～16:30 公開シンポジウム

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1  
国土館大学 文学部 地理・環境専攻  
長谷川 均(日本サンゴ礁学会大会事務局) 宛  
Fax: 03-5481-5247

## 参加・発表申し込みへの記載事項

1. 参加者氏名
2. 所属(学生の方はその旨を明記してください)
3. 住所
4. 電話
5. FAX
6. e-mail
7. 発表の有無
8. 懇親会への参加・不参加
9. 参加費支払い方法(事前・当日)
10. 発表題目
11. 発表者全員の氏名・所属(発表者には をつける)
12. 内容概略(100字程度)
13. 発表形態(口頭 or ポスター)

口頭の方は使用機材(液晶プロジェクター or OHP)を記載して下さい。  
本大会ではスライド映写機は準備いたしません。プロジェクターによる発表要領やポスターの大きさ等については、発表を申し込みました方に後日ご連絡いたします。今回もポスター発表を充実させ、口頭発表を1会場とする予定です。

ポスター発表にはプレゼンテーション賞を設けますので、ふるってご参加下さい。

なお、発表申し込み後に発表題目や発表者に変更がある場合、訂正内容を e-mail または FAX にてご連絡下さい。

e-mail: jcrs7@kokushikan.ac.jp

Fax: 03-5481-5247

## 講演要旨集原稿作成要領

- ・用紙: A4 1枚、上下3cm 左右2.5cmをあける。
- ・書式: タイトル15pt、氏名・所属10.5pt(発表者氏名の前に 印)、本文10.5pt(40字×40行=1600字程度)
- ・その他: 図表、写真は適宜貼り込んで下さい。

## 講演要旨集原稿の送付先

(郵送のみの受付とさせていただきます: 10/13(水)必着)

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1  
国土館大学文学部 地理・環境専攻  
長谷川 均 宛(要旨集原稿在中と朱書)

## 振り込み方法

事前の振り込みにご協力下さい(10/13(水)まで)。手数料はご負担下さい。大きな郵便局でしたら、同封の用紙を使って休日でも機械からの振り込みが出来ると思います。

・郵便振替口座番号: 00100-3-463440

・口座名称: 日本サンゴ礁学会

第7回大会事務局

・通信欄への記入事項: 氏名、所属、送金内容(一般、学生、懇親会の区別)  
複数の方がまとめて振り込まれても結構ですが、上記を全員について明記して下さい。

## 公開シンポジウム(準備中)

日 時: 2004年11月14日(日)  
13:30～16:30

場 所: 国土館大学世田谷校舎  
多目的ホール

テーマ: 「サンゴ礁世界の協調  
～時間を超えた人との交わり～」  
(仮題)

内 容: サンゴ礁の世界。  
そこは長い時間が流れる中で、自然が育まれ、生物が生き、人々が暮らし、そして神が……。このような世界を輪切りにしてみることができないだろうか。そこから見えてくるものは?

今後、新たに更新された情報につきましては随時、学会ウェブ  
(<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>)や sango-MLにてお知らせいたします。

## 第7回大会参加発表申込要領

### 大会参加・発表申込等期限

9/25(土) 大会参加・発表申し込み締め切り

10/13(水) 要旨集原稿締め切り(郵送のみ受付) 参加費事前振り込み期限

### 参加登録料

事前振り込みは、一般5000円、学生3000円。当日支払いはそれぞれ6000円、4000円となります。

懇親会費は5000円(共通)です。

大会には参加されない同伴者の方も懇親会にはご参加いただけます(同額)。

当日の混乱を避けるため、事前の振り込みにご協力下さい。事前振り込みの期限は10/13(水)までとさせていただきます。なお、事前振り込みをいただいて当日不参加の場合、参加登録料は返却いたしません。後日講演要旨集を郵送いたします。

### 大会参加・発表申し込み先

大会事務局 長谷川 均 宛、e-mailでの申し込みにご協力下さい

(jcrs7@kokushikan.ac.jp、subjectを"jcrs7 参加申込"とする)

FAXまたは郵送で申し込まれる方は、右記をお願いします(9/25(土)必着)



日時：2004年6月27日  
16:00～17:00  
場所：かりゆしアーバン  
リゾート6F「王朝」  
参加者（24名）：  
山里・土屋・茅根・鈴木・カ  
サレト・中井・林原・橋本・  
日高・大森（信）・大森  
（保）・藤原・大見謝・鹿熊・  
灘岡・小西・西平・立田・杉  
原・中森・中野・山野・菅・  
波利井  
委任状（2名）：藤田・秋道  
欠席（4名）：木村・近森  
藤村・松田

事務局（茅根）  
会計報告があった。おおむね  
当初計画通り処理されている。  
第10回国際サンゴ礁シンポジ  
ウムに70万円追加支援した。  
第6回大会のハンドオーバー  
については、正確には、準備  
金返却および寄付金である。

日本のサンゴ礁  
英語版ができ上がり、ICRSの  
正規参加者に配布することの  
報告があった。  
日本語版は8月末完成予定。日  
本サンゴ礁学会会員には無償配  
布。著者には5冊配布する。  
環境省から、英語版の執筆料  
として学会に120万円支払う  
と報告があった（書籍販売は  
個人の利益にならないので、  
個人で分けるのは困難。用途  
を明確にして使用する）。さら  
に普及のために、1000冊増刷

して3500円（利益のでない価  
格）で販売、それについては  
10%の35万円を学会に支払  
いたい。  
この他、以下の意見・質問が  
あった。  
・出版元は自然研。この他、  
著作権・奥付はどこになる  
のかとの質問があった。  
・増刷（1000部）について・・・  
完売後の著作権の問題を明  
確にしたうえで、増刷を認  
めることにしたい。  
改版時の原稿・データ使用  
を学会に認めるという確認  
をとり、追加販売について  
折衝する。  
環境省・日本サンゴ礁学会  
編は変更せず、出版社 自  
然研・ISBNをつけたい著  
者への謝礼がでるのかとの  
質問があった。  
・販売について・・・  
3500円で販売したいとの意  
見に対し、安価であるとの  
意見があった。  
・日本サンゴ礁学会入会促進  
に使用したい（ICRSの入会  
分まで無償配布することで  
合意）  
・「日本のサンゴ礁」の訂正  
事項・・・  
今回の分でミスがある。正  
誤表を作成してほしい。自  
然研（もしくは環境省）よ  
り、著者に必ずアナウンス  
してほしい。  
・日本語版・・・  
配布方法について、日本サ

ンゴ礁学会で負担してほし  
いとの意見があったが、出  
版側と交渉してほしいとの  
意見があった。

広報（山野）  
年間4号発行した他、Webを  
更新した。次号NLは10th  
ICRSの特集および第7回大会  
案内を掲載する。

企画（中森）  
日本のサンゴ礁研究について  
の報告があった。データベ  
ースwebでUpdateしたい。文  
献集は1号で掲載できなかった  
分も掲載したい。

編集（日高）  
5号を出版した。現在、次号  
の原稿を募集中。本年度も1  
号のみの出版となりそうであ  
るが、公開シンポジウムの  
Proceedingsとして利用すべ  
ば2号分の発行可能。

選挙（灘岡）  
今年は選挙なし。評議員任期  
4期制の見直しを検討。まず  
は現状を調査する。

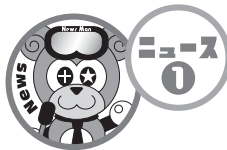
保全（灘岡、鹿熊、土屋ほか）  
ANAグループのサンゴ移植プロ  
ジェクトに対する学会の対応。  
特別採捕（鹿熊）  
ガイドライン、ICRSが終わ  
ったら作成（移植に関して）  
国際活動分科会（土屋）  
ICRIの事務局（現在、イギ  
リス）が日本にきそうであ  
る。環境省、JCRSと協力  
して行っていく可能性がある。  
なお、土屋はICRS後

のICRIの会議に参加。

安全（杉原）  
学会NLに、JAMSTECよりダイ  
ビングの危険に関する原稿  
を掲載して、調査の安全を促  
している。大学が法人化し、  
より安全に気を配る必要があ  
るとの意見があった。委員会  
では、次回大会時に安全対策  
の企画を検討中。

第10回国際サンゴ礁学会準備  
状況（土屋）  
登録・巡検等、順調に進んで  
いるとの報告があった。総予  
算約9200万円。  
LOC、IOCでは最終の組織委  
員会を開催する。  
トラブル  
同伴者の昼食券は無償配布  
（ウェブにそのむね掲載さ  
れていた）  
パンケット券を売れない  
か？ 会場委員会の裁量  
登録 - 大変スムーズにい  
っている。  
沖縄宣言 - 全体の組織委  
員会で決定することとなった。  
組織委員会の報告内容を確認した。  
事務局では毎日、ミーティ  
ングを行うことにした。  
巡検報告 パラオ 無事  
終了、石垣、菅さんのものも  
順調

第7回日本サンゴ礁学会準備  
状況（中井）  
国土館大学で長谷川・中井が  
担当。11月11日-14日開催  
（11日が評議員会）  
公開シンポも予定している。



## 潜水における 安全対策

海洋科学技術センター 総務部  
竹内 久美

海洋科学技術センター（平成16年4月  
1日より、（独）海洋研究開発機構）では、  
開設当初より、国内における唯一の公的な  
潜水の研修機関として、潜水技術に関わ  
る研修事業を実施している。開設当初は、  
主にヘリウム・酸素の混合ガスを用いた深  
海潜水に携わるダイバーを養成する目的で  
実施してきたが、その後は社会的ニーズの  
変遷に伴い、現在はスク・バ潜水を主とし  
た研修を行っている。当該研修の参加者は  
ここ数年来、年間約350名程度となってい  
るが、その多くは全国の警察（機動隊）や  
消防の水難救助隊員である。

そもそも、かれらが潜水を行うのは人や  
車両等の「捜索」や「回収」といったこと  
が主な目的であるために、その範囲は海域  
のみならず河川や湖沼、それにダムに及ぶ

ことさえある。しかも、その多くは視界不  
良の水域である。そこが一般のレジャーダ  
イバーたちの行う潜水とは、明らかに異な  
った点である。要するに、かれらは潜る場  
所、潜る条件を選択できないのである。

そこで、そのような現場で活躍する隊員  
たちに対する研修の概要と安全対策につい  
て、当センターで実施している研修を例に  
紹介する。

当センターでは、5日間コースと10日  
間コースの研修を設けており、前者は、午  
前中は主に講義、午後はプールでの基礎訓  
練といったカリキュラムで、これらを通して  
、基礎的な知識・技術を教養しているが、  
特に講義では、潜水事故の事例などを紹介  
しながら、「潜水の怖さ」を教えている。  
また、プール訓練では、まず、当日の訓練  
内容をビデオとホワイトボードを用いて説  
明し、さらに指導員がデモを行うことによ  
り、内容の理解を深めている。そして、訓  
練開始前はウェットスーツを着用したの  
ち、3点セット（スノーケル、マスク、フ  
ィン）を着けて約30分間のスノーケリン  
グを行わせ、フィンキックによる泳力を養  
っている。訓練中は指導員がプールの中、

のぞき窓、それに水中カメラを用いてプー  
ルサイドから常に監視を行っている。

一方、当センターの地先で行う海域訓練  
では、岸壁や水面からの監視に加え、警戒  
船からの監視を行い、さらに、水中交話装  
置（ダイバー同士またはダイバーと陸上の  
監視者と間での交話）やマーカーブイを使  
用して安全管理に努めている。この海域は  
春先から夏場にかけて、例外なく赤潮が発  
生するために視界が数十センチとなること  
が珍しくなく、そのような時は、泡でダイ  
バーの位置を確認するのは極めて困難とな  
る。そこで威力を発揮するのが水中交話装  
置やマーカーブイである。特にマーカーブ  
イは安価で扱いやすいものなので、常に使  
用している。

現在、使用中のものは船の防舷材となる  
シリコン製のもの（直径25cmの球形）で、  
それに10mm程度のロープを取付け、その  
先端をBCにくくり付けている。これはダイ  
バーの所在確認のみならず、ダイバーと  
陸上（船上）の監視者との通信にも極めて  
有効に活用される。

以上のようなことを遵守することによ  
り、潜水を安全かつ効率よく実施している。

# 第10回国際サンゴ礁 シンポジウム 特集



ウェブページ  
<http://www.plando.co.jp/icrs2004/>

山里 清  
 (日本サンゴ礁学会会長)

第10回国際サンゴ礁シンポジウムは、成功裏に終了したと思います。茅根さんの総括にあるように、いくらか理想的にはいかなかったところもあったようですが、国際的に恥ずかしくないシンポジウムになったと思います。土屋委員長、茅根事務局長、企画運営委員各位のご尽力は、

並々なるぬものがありました。特に茅根さんのご尽力は、お役目柄以上に大きかったと思います。皆さんに心からお礼を申し上げます。

このようなシンポジウムは、近い将来には回ってこないと思いますが、もうそろそろ、国としては、2ラウンドに入ったという状態にあります。オーストラリアがすでに2回、アメリカが次回で、2回目となります。案外早く、日本に2回めの要請が出てくると思いますので、今回の組織委員会の経験を生かすことも、遠い先ではないと思います。

私は、開会式でも指摘したように、サンゴ礁研究は、海洋科学全体の中では、不釣り合いに少数派であったと思っていましたが、今回のシンポジウムを契機に、質量ともに飛躍的に発展したものだと思います。開会式では、量的に拡大したので、シンポジウム開催

の目的の半分はすでに達成したと報告しましたが、シンポジウムの成功や、シンポジウムでの発表内容の充実振りを見て、第10回国際サンゴ礁シンポジウムは、その目的を、少なくとも主催者の立場から見ると、100%達成したもといえると思います。改めて組織委員会、サンゴ礁学会会員の皆様のご苦勞に感謝を申し上げます。

土屋 誠  
 (琉球大学、組織委員長)

本格的に国際サンゴ礁シンポジウムを誘致しようと話し合いを開始してから8年が過ぎました。とても長い期間をかけた大きな仕事でした。閉会式の最後、私が閉会の挨拶をまだ話し終わらないうちに、参加していた皆さんが全員立ち上がり、拍手をしてくださ

ったことで、私たちの活動は評価していただいたのだと感じました。皆さん、大変お疲れさまでした。幾つかの反省点は今後の活動に生かすことにしましょう。

国際サンゴ礁学会会長のPoluninさんをはじめ、多くの方からねぎらいと賞賛をいただいています。それぞれの担当部分を見事にこなし、相互の連携が密にとれていたからこそ大成功したシンポジウムです。素晴らしい仲間たちと一緒に仕事をすることができたことは私たちが最も誇りにすべきことです。

私は、「この活動はシンポジウムを運営することだけが目的ではない」と言い続けてきました。琉球新報の社説では沖縄宣言を實行せよと励ましを受けています。これを一つのステップとして、さらに研究の発展、サンゴ礁の保全に向けて努力しましょう。

## 概要

### 1) 主催など

- ・主催：日本サンゴ礁学会、第10回国際サンゴ礁シンポジウム組織委員会、国際サンゴ礁学会
- ・共催：環境省、沖縄総合事務局、沖縄県
- ・後援：外務省、国土交通省、水産庁

### 2) 開催期間

2004年6月27日(日) - 7月2日(金)

### 3) 開催場所

沖縄コンベンションセンター

### 4) テーマ

- 「サンゴ礁生態系の恒常性と崩壊」
- サンゴ礁を未来の子供達のために -
- サンゴ礁の生態系の進化
- サンゴ礁形成を左右する環境要因

生態系の安定性と生物地球化学的サイクル

人間とサンゴ礁の共存に向けて

### 5) セッション構成

- ・セッション数 59(各テーマごとに特別セッションを設ける)
- ・基調特別セッション「人々とサンゴ礁 - 東南アジア・沖縄からのメッセージ -」

### 6) 発表数

1381(口頭770, ポスター611)  
 基調講演7

### 7) 参加者数

1370名、87ヶ国・地域、  
 一般600人(計1970名)  
 内訳(事前登録者数 米国386、  
 日本237、オーストラリア143、  
 英国、フィリピン、インドネシア、  
 台湾、フランス、ブラジル、タイ、

イスラエル...)

### 8) 巡 検

パラオ、久米島、阿嘉島など9カ所。  
 このうち、ポストシンポジウム巡検のうち、石垣島、那覇港は台風7号接近による波浪のため、残念ながら中止となった。

### 9) セレモニー

開会式、ウェルカムレセプション、  
 パンケット、閉会式

### 10) 沖縄宣言

閉会式において「危機にあるサンゴ礁の保全・回復に向けての沖縄宣言」を、参加者の全会一致で採択した。

### 11) 日本のサンゴ礁

日本サンゴ礁学会と環境省の編集により、日本のサンゴ礁の状態をはじめとめた「日本のサンゴ礁(英語・日本語)」を出版した。

## ICRS 報告 [シンポジウムの様子]

6 27

### ビーチパーティー

嵐のように過ぎた10thICRSですが、そのまさに前日、トロピカルビーチにて、Welcome Beach Partyを開催しました。当初、「50人くらい?」と高をくくって若手運営のみんなで買出しと設営を行い、案の定、開始時間には、海外研究者らしき数人が登場のみ。このペースなら・・・と思っていたら、続々登場! 最後には、200人以上のサンゴ礁好きが集まって、大量のビール(みんな飲みますねえ!)にBBQ、フリスビーを使ったTシャツ獲得ゲームで盛り上がりました。まさに、国籍・分野・世代の垣根を越えての大交流会。学会デビュー学生から、業界のビッグネームまで、ビーチを占拠する異様な集団。これも若手の力がなせた業です。協力してくれた皆様ほんとお疲れ様でした(バンザイ)

中村 崇(琉球大)



Welcome Beach Party



## ICRS 報告 [シンポジウムの様子]

### 6-28 オープニング

山里会長による開会宣言。ついに、待ちに待ったICRSがはじまりました！その後、ご来賓の方々にご挨拶を頂きました。その夜はウェルカムレセプションが開かれ、多くの大会参加者がオープニングの夜を楽しみました。



開会式 左から 茅根事務局長、土屋委員長、山里会長  
ご来賓 砂田環境大臣政務官、竹林内閣府沖縄総合事務局長、稲嶺沖縄県知事



ウェルカムレセプション 鏡開きの様子  
泡盛（日本酒じゃない！）の鏡開き。樽が割れた瞬間、大きな歓声と拍手が上がりました。左から Robert van Woosik, Richard Aronson, Nicholas Polunin, Terry Done, Richard Dodge, 山里会長



ウェルカムレセプション アトラクションの様子

### 6-29 ダーウィン賞 受賞

J E N Veronさん（AIMS, オーストラリア）に決定！ おめでとうございます。

ダーウィン賞は、国際サンゴ礁学会（ISRS）からサンゴ礁功績者に贈られるものです。今回は、造礁サンゴの分類の世界的権威 Veron さんが受賞されました。Veron さんは、西平守孝先生と「日本の造礁サンゴ類」を出版され、日本でも大変有名です。ICRS 期間中に開かれた公開シンポジウムでも、日本の造礁サンゴ類について詳しく解説してくれました。

### 7-1 バンケット

最終日の前日、ラグナガーデンホテルにてバンケットが開かれました。

バンケットでは、第10回ICRSを記念して第1回よりすべてに参加した研究者3名に、「皆勤賞」が贈られました（ICRSは4年に1回なので第一回大会から36年目！でも、皆様ご活躍中）。その後、受賞者より第1回ICRSからのスライド上映があり、大会の歴史をみることができました。

また、バンケットの最後には会場全体で踊り、盛り上がりました。



皆勤賞 受賞者 左から Peter Glynn, Michel Pichon, Bernard Salvat



バンケット 琉球民謡、唐船ドリーにのせてのカチャーシ（踊り）

### JCRSブース

JCRSブースでは、大会期間中の日本サンゴ礁学会や日本のサンゴ礁に関する問い合わせへの対応や、調査地域・居住地域を示すサンゴ礁分布図の参加型パネル設置などを通して参加者の交流を目的とした活動を行いました。JCRS広報委員と学生・PDボランティアの全面的な協力の下、25名を超える新規各種会員の加入の他、学会誌Galaxeaを多くのISRS会員に広めることが出来ました。また、450枚のTシャツの売上げは、大会前日のWelcome Beach PartyとJCRSブースの運営、10thICRS報告を兼ねた本NLの増ページ・カラーページに使われています。展示物製作やブース運営に協力してくださった皆様、どうもありがとうございました！

梅澤 有（東大海洋研）



JCRSブース（左）。  
ブースはISRS（国際サンゴ礁学会、右）とお隣でした

## ICRS 報告 [シンポジウムの様子]

7・2

## クロージング

ついに最終日。茅根事務局長から「危機にある世界のサンゴ礁の保全と再生に関する沖縄宣言」が発表され、採択されました（p. 12に全文掲載）。

また、次の開催地がフロリダに決定したことがアナウンスされました。

## 第11回国際サンゴ礁シンポジウム開催地決定！

2008年 11th International Coral Reef Symposium (11th ICRS) は、アメリカで最大のサンゴ礁のあるフロリダ (Ft. Lauderdale, Florida, USA) で開催されます。是非、参加しましょう！

メインテーマ “Reefs for the Future (未来のためのさんご礁)”

## 10th ICRS 科学巡検報告

菅 浩伸 (岡山大)



我々は第10回国際サンゴ礁シンポジウムの前後に計17の科学巡検を計画しました。地域やテーマが偏らないよう多様な巡検を企画しましたが、このうち7つの巡検は参加申込者が極端に少なく事前に催行不可能となってしまいました。この中には我々が見せたい巡検や、早くから準備を進

めていただいた巡検が多く残念でした。

今年は例年より早く台風が琉球列島を通り抜ける状況でした。プレシンポジウムの巡検は大型で強い台風6号が琉球列島を通り過ぎた数日後に始まり、良い天候に恵まれました。ただしパラオでは風のため若干の計画変更もあったようです。シンポジウム期間後半には2つの台風が日本周辺に進んできました。このうちフィリピン方向へ西進していた7号が進路を北へ変えたため、八重山では8m、本島付近でも4mの波高となりました。7月2日正午の天気概況と予報(図)を基に、やむなくB-5石垣・西表とC-3那覇港の2つの巡検を中止せざるを得ませんでした。

このように天候に左右された科学巡検でしたが、念を入れて作成していましたがダイビング安全書類や緊急連絡網の出番もなく、巡検全般が無事に進んだことが何より

と思っています。これも関係者の皆様の並々ならぬご尽力のおかげと感謝しております。



図：巡検の催否を決定した台風予想進路図(7月2日正午)

写真：A-3巡検(久米島～渡名喜島～慶良間～チービシ)

チービシにて巡検最後のダイブ(6月27日：遠藤慎一氏撮影)

## 科学巡検 B-3

## 「阿嘉島の自然」の報告

大森 信 (阿嘉島臨海研究所)

台風7号の余波で沖縄近海は時化、予定されていた科学巡検のいくつかが中止になった。7月3日、折角準備をしてきたのに阿嘉島もだめかとハラハラしながら泊港に集合した私たちは、船が出ると聞いてほっと一安心。集合場所に来なかった2名を除き申込んだ28名が阿嘉島に渡った。参加者の内訳はアメリカ16人、英国3人、オランダ3人、ドイツ2人、オーストラリア1人、マーシャル共和国1人、日本1人、コスタリカ1人である。単独の人も家族5

人のグループもあって、賑やかだった。それから7月6日のお別れまでずっと天候には恵まれず、ひかる慶良間の青い海を見せられなかったのは残念だったが、皆、サンゴ礁を満喫して喜んでくれた。ことにカリブ海のひどい状態のサンゴ礁で研究している人々には、阿嘉島のサンゴ礁は信じ



られないほどに美しい、とまでいわれた。本当は魚も少なくなったし、オニヒトデにかなり食べられてしまっているところもあるのだが。座間味村長や地元のダイビング協会を始め、阿嘉島の人たちがあたたかくもてなしたし、阿嘉島臨海研究所の所員とボランティアたち9名もよく活躍したので喜んでもらえた。また、村の人たちがサンゴの大切さを知ってニシハマなどの保全に注意している様子や一緒に協力している研究所の役割を知ってもらえたことは、よかったと思っている。楽しかったという参加者達からのお礼のメールが何通も届いた。

## 美ら海水族館エクスカーショ

## “夜の部”

山本広美

(美ら海水族館魚類課サンゴ礁系係)

ICRS 期間中、夜の水族館も楽しんでいた。と企画した沖縄美ら海水族館“夜の部”エクスカーショツアー、実は去年の段階では、飼育しているミドリイシの放卵放精がこの時期にあるはず？なので、それをぜひ見ていただきたい、と計画したものだったのです。しかし予想は外れ

て、今年の放卵放精は6月1日に起こってしまいました。残念。

ツアーは、コンベンションセンターからバスに乗って、水族館に9時到着、それから10時までの約1時間、一般のお客様がたどるコースを歩いていただくという内容。2日間で40人、小学生から大人まで世界各地の方々に参加していただきました。

夜のツアーでもやっぱり一番人気は、ジンベエザメとオニイトマキエイの泳ぐ“黒潮の海”。ここで時間をかけてゆっくり水槽を見る、という方が多数。かと思えば、われらがボス、野中さんの手塩にかけた宝

石サンゴの水槽に貼りつきっぱなしの方いらっやいました。参加された方々からは、“やっぱり1時間は短すぎる！もっと見たい！”という声が多く、ついで英語でのさまざまな解説パネルの要望などがありました。

実は7月2日のツアーの日に、予備槽でコモンサンゴたちが細々と放卵放精していたのです…。次回はぜひとも大水槽での放卵放精を見ていただきたい！

このツアーをもとに、一般のお客様にも夜の水族館をお見せするべく、スタッフ一同がんばりたいと思います！



## ICRS 報告 [セッション報告]



ポスター会場の様子 ポスター発表はほぼ毎日、展示会場で開催され、お昼には大変活発な議論が見られました。



セッションの様子 6/29 1-9-B Flexibility and specificity in algal-invertebrate symbiosis

## Plenary Special Session (公開シンポジウム)

灘岡 和夫  
(東京工業大学、  
Plenary Special Session 担当)

Plenary Special Session (公開シンポジウム)の参加者総数は約800人、うち会議登録者数が約200人でした。地元の一般の方に数多く参加して頂いたと思える反面、もう少し会議登録者にも参加して頂きたかったという感じです。各講演者の方々は、一般の参加者が多いことを考慮して、一般

の方にも比較的わかりやすい内容でお話し頂けたのではないかと思います。第1部の司会の土屋先生、第2部の司会の大森先生からも、わかりやすい概要説明を頂きました。

第2部終了後の「交流会」では、地元宜野湾市の長田小学校6年生111名によるパフォーマンス「宇宙船地球号に乗って」が演じられました。琉球大学瀬底実験所と長田小学校をInternetで結んで行われたサンゴ礁の環境教育の成果も取り込んだものということでしたが、かなり感動的でした。実現に際してご尽力頂きました中野さんに感謝致します。

その後行われました第3部では、鹿熊さんの司会のもと、なかなか興味深い内容の

パネルディスカッションが行われました。夜6時半から8時までという遅い時間であったこともあって、さすがに参加者の数は減っていましたが、それでも熱心な質疑応答が交わされました。

全体の印象として、海外からの参加者に琉球列島のサンゴ礁の諸問題やいろんな取り組みを知ってもらおうという意味では、上記のように外国人の参加者が少なかったことからやや物足りないところもありましたが、地元の一般の方々への情報発信・アピールという意味では十分な成果があったのではないかと思います。

## 国際サンゴ礁イニシアティブ ICRI総会(沖縄)の結果について

高橋 啓介  
(環境省自然環境局自然環境計画課)

国際サンゴ礁イニシアティブ(ICRI)は1994年に日米をはじめとする8ヶ国で開始されたサンゴ礁保全のための国際的な枠組みです。1995年にフィリピンのドゥマゲットに於いて、国際サンゴ礁ワークショップを開催し「行動の呼びかけ(Call to Action)」、「行動の枠組み(Framework for Action)」を採択したのを始まりとして、各地域でのワークショップや年に2回の総会を開催し、サンゴ礁保全活動の方向性を決定するための情報交換や議論を行っています。国際サンゴ礁シンポジウムに引き続く、

7月3日(土)~7月4日(日)にかけて、沖縄コンベンションセンターで、ICRIの総会が開催されました。総会では、計74人(18カ国の代表と21の国際機関及びNGO、大学から)が参加し(日本からは琉球大学理学部 土屋誠教授、環境省自然環境計画課 黒田課長をはじめとする8名が出席)、サンゴ礁の保全に関する今後の方向性などを話し合いました。今回の総会で最も特筆すべき事項は、2005年7月から2年間の事務局を日本とパラオ共和国が共同で引き受けることが決定されたことです(ICRIの事務局は参加国が2年間に任期で持ち回りで実施しており、現在はイギリスとセيشェルが共同で実施しています)。

また、直前に開催された国際サンゴ礁シンポジウムの結果について組織委員会委員長の土屋先生から報告がなされ、そのスムーズな運営、ICRIのセッションを設けるなどICRIに配慮したプログラム、及びサンゴ

礁の保全に関する沖縄宣言の採択について、高く評価する言葉が寄せられました。さらに、リチャード・ケンチントン氏により、第3回熱帯海洋生態系管理シンポジウム(ITMEMS)を2006年に開催することが提案され、開催の可能性等を検討するためのワーキンググループが設置されました。

その他、地球規模サンゴ礁モニタリングネットワーク(GCRMN)や国際サンゴ礁行動ネットワーク(ICRAN)の今後の活動について議論がされ、また、最近の話題として、冷水域のサンゴ礁の保全やグレートバリアリーフの新しい公園計画などについて報告がありました。

今回の総会は来年(平成17年)3月又は4月にセيشェルで開催される予定になっており、そこでは、日本とパラオの事務局の具体的な活動内容などが議論される予定になっています。

## 1-9 Flexibility and Specificity in Algal-Invertebrate Symbiosis: Diversity, Stability, and Physiological Capacity of Symbiosis Dinoflagellates (Special Session)

諏訪 僚太(琉球大学・院・理工)

90年代に提唱された「地球温暖化がサンゴの世界規模な白化とそれに伴う大量死を引き起こしている」とする説はその後数多くの研究により支持され、現在では揺ぎ無いものとなった。本セッションにおけるこの分野の研究には、環境ストレスによってサンゴの白化が引き起こされる際に生体

内でどのような変化が起きているのかを解明する方向性と、ストレスに対する感受性が宿主サンゴと褐虫藻の遺伝的タイプの組み合わせにより異なることを示す方向性の2つの大きな流れが見られた。後者はサンゴが環境変動にどのように応答・適応してゆくかを予測可能にするものであり、これからの発展が期待される。

広瀬 慎美子(琉球大・理工・海洋環境)

90年代に始まったDNAを用いた褐虫藻解析については、方法論が確立しつつあり、そこから進んで、宿主特異性、地域特異性、サンゴの成長との関係、ストレス耐性など

についてマクロ的な解析への方向と、マイクロサテライトやレトロトランスポゾンなどをを用いたさらに細かい分類へ進む方向とが見られた。また、Dr. Weisのグループからは、サンゴと褐虫藻の共生関係の機構について分子生物学的なアプローチを行っており、共生に関わる遺伝子の大規模なスクリーニング(EST project)も立ち上げたとの報告があり、今後の結果に期待が寄せられる。

このセッションに関連し、サンゴ褐虫藻研究に大きな功績のあった川口四郎先生を囲んでのパーティーが行われた。当日は川口先生は体調を崩されて出席できなかったが、50名以上の参加者がセッションとは異なった堅苦しくない雰囲気での親交を深めることができた。

ここに載せきれなかったセッションの報告を日本サンゴ礁学会のウェブ(<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>)に公開します。セッションについての報告を書いて下さる方は広報委員会([jcrs\\_pub@wv.mei.titech.ac.jp](mailto:jcrs_pub@wv.mei.titech.ac.jp))にご連絡下さい。よろしくお願いいたします。



# シンポジウムの 成果を今後につなげるために

事務局長 茅根 創 (東京大・理)

## 1. はじめに

第10回国際サンゴ礁シンポジウムを無事終えることができました。誘致以来、事務局として縁の下で、ときには縁台の上までしゃばって、組織委員会を運営してきましたが、委員会の一致団結のもと、成功裏に終えることができました。組織委員会の皆様、ご支援下さった皆様、ご参加下さった皆様と喜びをともにしたいと思います。事務局として時に強引な運営もあったかと思いますが、何とぞご容赦下さい。

## 2. 総括

国際サンゴ礁シンポジウムは、1981年第4回フィリピン以降参加者が500人を越えましたが、1992年第7回グアムまでは500-600人規模の学術集会にとどまっていた。しかし、1995年に国際サンゴ礁イニシアチブが立ち上げられた後は、1996年第8回パナマ以降参加者が1000人を越える大規模な学術イベントに変わりました。同時間帯に並行して行われるセッションも10を越えるようになり、参加者は自分が出席したセッション以外、全体として何が焦点だったのかがわかりにくくなっていました。

そうした問題点をふまえて組織委員会では、並行セッションをできるだけ減らすとともに、シンポジウムの焦点を伝えるためにいくつかの仕掛けを用意しました。前者のために、口頭発表の時間をこれまでの20分から15分に減らし、口頭発表は1人1題に限りまし。また確実に口頭発表をしてもらえるように、登録料受付をもって発表受付としました。信じられないことですが、これまでのシンポジウムでは、セッションの3分の1程度が発表キャンセルということもめずらしくなかったのです。こうしたある意味のんびりとした運営は、参加者500人程度の学術集会なら許されますが、1000人を越えると許されることはありません。一方で委員会では、口頭発表を時間通りに進行するために、パワーポイントファイルの受付システムを入念に準備し、また口頭発表の不足分をポスターで補ってもらうためにポスター発表に十分なスペースをとりました。努力のかけがえあってセッション運営のシステムはきわめてスムーズでした。

シンポジウムの焦点を伝えるために、全体テーマと5つのサブテーマを設けること、ミニシンポジウムをサブテーマごとにまとめること、各サブテーマに特別セッションを設けること、閉会式の際に「沖繩宣言」を採択することなど、様々な仕掛けを用意しました。これらの仕掛けは、サンゴ礁に対する委員会の統一した認識のもとに組み立てられており、参加者にシンポジウム全



主要な組織委員紹介  
(パンケットにて)

左から 新垣会場委員長、山野広報委員長、小西接遇委員長、山里会長、鈴木プログラム委員長、瀬岡財務委員長、茅根事務局長、土屋組織委員長

体についての印象を残すことに有効に作用したと信じています。

一方で、シンポジウムの重要な機能である人と人との交流については、500人規模の時のような家族的な雰囲気は作れなかったのではないかと思います。これは1000人規模になってしまえば仕方ない面もあるのですが、セレモニーのアトラクションやサテライトシンポジウムを積極的に受け入れること、さらに直前に若手の皆さんが企画してくださったピーチパーティなどで、できる限り受け入れる体制は作りました。しかし委員会で用意した正規のプログラムとは別に、センター周辺や国際通りの居酒屋は、連日参加者が満員だったときいていますので、参加者は各人でそうした交流を楽しんで下さったようです。

## 3. サンゴ礁学のレヴェルアップ

シンポジウムが成功したことで、私たちの役目は終わったわけではありません。むしろ、これからが始まりといえるでしょう。シンポジウムの成功を今後の研究のいっそうの発展につなげるためには、次の2点が重要と考えます。ひとつは科学としてのサンゴ礁学をいかにレヴェルアップできるかということ、もうひとつは国際的なサンゴ礁研究のコミュニティにおける日本の役割をいかに維持・拡大することができるかということです。

サンゴ礁学のレヴェルアップという点では、1996年以降飛躍的に増えた参加者に見られるサンゴ礁学の隆盛が、決して科学の内発的な動機だけによるのではないという点に注意しなければなりません。サンゴ礁に対する関心は、多様性の高い生態系に対する新しい原理の発見という科学自身の内発的な動機だけでなく、サンゴ礁の保全と管理に対する社会の関心の高まりという(科学にとっては)外発的な動機によるものといえるでしょう。これは、政策である国際サンゴ礁イニシアチブ立ち上げ後に、シンポジウム参加者が急増したことから明らかです。保全や管理は、基礎的なデータの取得がもっとも基本的なもので、新しい原理の発見という科学の目的とは異なる点があることは認めなければなりません。科学の発展にとって裾野の広がりは大切ですが、ピークを高める努力も怠ってはいけません。次のピークとして何がサンゴ礁研究をリードしていくのかを、今回のシンポジウムの成果から見極めて、ブレークスルーをもたらすような研究を積極的に進めていかなければなりません。

科学と社会(保全・管理)は別だという考えにこそ、ブレークスルーが必要なのかもしれません。研究対象であるサンゴ礁の劣化という事態を前に、社会システムまで含めた保全・管理の科学を立ち上げること

が、21世紀の新しい科学を作るブレークスルーになるのかもしれない。

## 4. 日本の役割

国際的なサンゴ礁研究における日本の役割という点で、これまで日本は主導的な立場にあったわけではありません。戦前はパラオに熱帯生物研究所を設置して国際的な研究を展開してきましたが、戦後フィリピンを失って以降は、低緯度海域にフィールドを維持した米国、フランス、イギリスと、国内にサンゴ礁を持つオーストラリアが、世界のサンゴ礁研究を主導してきました。しかし、1990年代に入って我が国でも様々な研究機関、民間においてサンゴ礁研究が活発に行われるようになったにも関わらず、日本は国際的な研究コミュニティの維持に関わる応分の責任を果たしていませんでした。1996年にすでに国際サンゴ礁学会における日本人会員の数は、米国、オーストラリアについて3番目に多かったにもかかわらず、それまで8回開催された国際サンゴ礁シンポジウムを開催しておらず、日本人の評議員もいませんでした。日本人がコンピーナーをつとめるセッションもわずかでした。研究者個人としては、すばらしい成果をどんどん国際誌に発表してきたにもかかわらず、研究の発表の場は他所に用意してもらっている状況は、研究ただ乗りと言われても仕方ありません。

今回、国際シンポジウムの開催に成功し、それが認められたことで、ようやく日本も応分の責任を果たすことができました。さらにシンポジウムの誘致をきっかけとして、国内の研究者組織である日本サンゴ礁学会を1997年に設立、さらに今回のシンポジウムにあわせて「日本のサンゴ礁」を発刊し、国内のサンゴ礁研究は一応のまとめを果たしました。

しかしここで立ち止まってははいけません。

参加者が500人規模の時は、次の開催引き受け手がなかなか見つからなかったこのシンポジウムも、1000人規模になりその社会的重要性が高まるにつれて、毎回複数の国が誘致するようになりました。今回の誘致も複数の国が名乗りをあげ、米国とオーストラリアが激しくせりあいました。今回のシンポジウム正規登録者数(事前登録)は、なんと米国がもっとも多く、開催国の日本は2番目でした。我が国の研究者たちも、サンゴ礁研究にここまで国際的な関心が高まっていることに気づいていないようです。サンゴ礁研究が国際的にますます重要性を増し、関心を集めていく中で、今回のシンポジウム成功をきっかけとして、我が国のサンゴ礁研究をよりいっそう発展させるとともに、国際的に研究を米国、オーストラリアとともに主導していくことが必要と考えます。

## ICRS 報告 [委員会報告\_感想]

## 財務委員会

## 財務委員長として

灘岡 和夫 (東京工業大学)

第10回国際サンゴ礁シンポジウムの必要予算額は、最終的にはおよそ9500万円に達しました。このうち会議登録料でまかなえた額はその半分強の5200万円に過ぎません。つまり残る4300万円は外部からの資金援助等に頼らなくてはならなかったわけですが、まだまだ経済状況が厳しいわが国にあって、結果的にこのような巨額の援助金を集められたというのは、今から考えると奇跡的なことだったのかもしれない。

金額規模からいって特に大きかったのは環境省、沖縄総合事務局、沖縄県からの援助でした。その三者で必要援助金額の半分以上をまかなうことができました。実は、「国際サンゴ礁シンポジウム」というある特定の分野の国際会議に対して国や県からこれだけの手厚い財政援助をしていただけというのは、かなり異例のことなのですが、

それが可能になったのは、それぞれの組織の中でのキーパーソンの方たちの働きによるところが大変大きかったと思います。具体的には、特に、環境省の高橋さん、沖縄総合事務局の花城さんのお名前を挙げる必要があります。このお二人は予算関係でお世話になっただけでなく、企画運営委員会のメンバーとしても大変ご活躍いただきました。この場を借りましてあらためて御礼申し上げます。沖縄県については、県の方もさることながら、粘り強く交渉に当たっていただいた土屋組織委員長のお名前を挙げるべきでしょう。また、上記以外の国の機関や民間等から残る必要額を集めることができました。特に民間からの寄付につきましては、濱田委員長を委員長とした募金委員会を立ち上げて、中井さんを中心に、経団連ルートなどでの募金獲得に奮闘していただきました。

支出につきましては、各項目を十分精査し全体の予算規模を押さえる努力をしましたが、全ての予算項目を一律に押さえ込んだわけではありません。LOCAPや前回バリ大会のときに評判が悪かったポスター会場の設営費など、特に重要と位置づけられる項目については十分な予算を振り向けるようにしました。例えば、LOCAPについ

ては、当初、援助対象者数として数名程度という数字が出ていたのですが、山里会長と私は対象者の大幅増を主張し、最終的に50名(うちfull support: 30名、partial support: 20名)を対象とすることになりました。

最後に、立田さんのご活躍については是非とも触れておきたいと思います。立田さんにはいろんな契約事務や経理関係の細部にわたるチェックを精力的にやって頂きました。今回の経理処理が全体として円滑に進んだのは、立田さんのお力によるところが大変大きかったのは疑いないところだと思います。

このような多くの方々のご努力が最後に実を結び、シンポジウムのわずか1ヶ月ほど前によく収支バランスを確保できる見通しになりました。その時点で私の財務委員長としての仕事はほぼ峠を越えたように思えました。あとは、皆さんのこのような大変な努力によって実現したICRSを、単なる一過性のイベントとして終わらせるのではなく、1つの重要なステップとして位置づけ、日本のサンゴ礁学会として今後の発展につながるよう期待したいと思います。

## プログラム委員会

## 科学プログラム

鈴木 款 (静岡大学)

「解決できない程の大きなトラブルもなく無事に終えてよかった。」「プログラムの編成ではほとんど不満等が聞こえてこなかった。反対にTerry, Nick, Clive等からはGreatと言われた時はとても嬉しい気持ちでした。」「会場の狭さについてはどうしようもなく、頭の痛い問題でしたが、会場が係の努力で大きな混乱はありませんでした。

た。これもうれしい限りでした。」

プログラム編成では予想以上に申し込み数が多く、すべての発表を希望通り、従来と同じように行うことは会場の数を増やすことになり、また同じようなミニシンポを並行して行うことになり、インドネシアのバリの大会で指摘された問題を解決できないと思い悩みました。この問題に解決の糸口を与えてくれたのが茅根さんの主催した一月の国際シンポでした。この会議で参加者から口頭発表は一講演15分にしようとする案が、その線でプログラムを編成すると決めたことです。さらに、プログラム編成では会場の広さがもともと広くない会場が多いので、できるだけ小さく分割したくないと考えたことです。そのために会場を8つぐらいにすることを考えました。しかし、

ここでまた二つの大きな問題がありました。一つはスペシャルシンポの水曜日の午後全部を使うこと、その間は他のミニシンポは行わないこと、さらに、各テーマ毎に特別シンポを設けそれらを同時には行わないことを原則としたため、使用できる日数とが限られました。これによりどうしても8会場では収まりきれなく、10会場にしました。そこでできるだけ同じ内容のミニシンポを並行して行わないこと、さらに一日の口頭発表とポスターの発表の数をほぼ同じにすることでプログラムの編成を進めました。コンピーナーの協力、中森先生、日高先生のご協力、何よりも岩水さんと麻原さんの協力組織委員会の皆様の協力なくして、本プログラムの編成等の仕事は出来ませんでした。有難うございました。

## 接遇委員会

## 支援プログラム

小西 健二 (金沢大学名誉教授)

大変な突貫作業でしたが、何とか間に合ったのは、ご多忙なか、選考委員をお引受け下さり、選考期日締切を守って下さった、委員各位のご尽力・ご協力の賜物とし、か言い様のない奇跡の末でした。選考委員の皆様本当に有難うございました。「今後の参考になる楽しい経験だった」と異口同

音のお返事に救われました。皆さんのお名前は選考の過程・結果などとウェブに表示しており、是非ご覧下さい。

STAP (ICRS/ISRS Student Travel Award Program), LOCAP (Additional LOC Financial Support)とも、各委員の評価結果

に基づき候補者一覧表を作成し、最終的には、二人の代表委員の間で協議の未決定しました。STAPは7名(過去最高数)、LOCAPは42名の受賞者でした(写真)。会期中に大勢から礼を受けましたが、会期後もお礼のメールが届いています。



応募書類の受付も、選考結果の本人宛通知も、その後の対応一切が事務局(ブランドウ・ジャパン)を通じて行われたため、すべて円滑に事が運びましたが、そのため事務局の仕事量は、当初の予想を遥かに超えることとなったことを付記し、事務局担当職員、ことに岩水・麻原の両氏に心から篤く感謝します。

財務委員会、接遇委員会、会場委員会および高橋さん、花城さんの報告に関しましては、編集担当の責任で編集させていただきました。全文は日本サンゴ礁学会のウェブ(<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>)に公開します。また、他の委員からいただいた報告・感想もウェブに掲載いたします。



## 広報委員会

### 参加者への広報

山野 博哉 (国立環境研究所)

私がおこなってきたことは、今回のシンポジウムの主に参加者向けの広報です。他の委員会、特に事務局とプログラム委員会と密に連携を取りつつ、最新の情報をウェブで掲載し、MLに流すという作業をおこなってきました。また、要旨の受付や登録に関してもウェブ経由で行えるようにしました。さらに、シンポジウムの様子をウェブ経由で放映いたしました。シンポジウム期間中は、ネットワークを活用した発表ファイル受付を日高先生とともに担当しました。こうした活動によって、技術先進国日本の名に恥じないネットワークを最大限活用したシステムが構築できたのではないかと思います。

もちろんこの活動は私個人の力だけによるものではありません。ウェブの作成・更新には事務局の岩水さんとMS研究所の川瀬さんに大変ご努力をいただきました。演題受付には岩水さんのご紹介で東京大学のUMIN演題受付システムを活用させていた

できました。これは無料でありながらきちんと維持されているすばらしいシステムです。また、ウェブ放映に関しては鹿熊さんのご紹介で慶應大学鶴野研究室の全面的なご協力をいただきました。心より感謝いたします。シンポジウムのウェブ (<http://www.plando.co.jp/icrs2004/>) はまだ更新されていますので、皆様今後とも覗いてみて下さい。

また、プレスに関しては中井さんに全面的にお願いしました。私が広報委員長となっていました。中井さんが実質私以上のご努力・ご活躍をされたことを申し添えます。

### プレス担当雑感

中井 達郎 (国士舘大学)

私は、主に東京側での民間資金調達とプレス対応を担当いたしました。私の力不足を棚に上げて、両方を通じて感じたことは、日本全体として、あるいは東京では、「海」「サンゴ礁」についての理解と関心が、まだまだ低いものだということです。森や山など陸上の自然については、その保全活動についても力を入れている企業がずいぶん増えてきました。メディアの方も、関心の高い記者はいるのですが、デスク以上にな

ってくと、トーンが下がってしまいます。ちょうど参議院選挙が翌週末に控えていたことあるのですが、それでも沖縄県内では、沖縄側委員の方々の努力があった結果、会期直前から会期中にかけて、新聞・テレビに、積極的に報道をしていただきました。

会期中に対応したメディア関係者は30名を越えました。メディアの方々の感想は、大きく2種類あったように思います。「こんなに規模が大きいものとは思わなかった」「こんなに外国人が多いとは思わなかった」というもので、オープニングや沖縄宣言を含むクロージングは、多数のメディアが入っていました。その一方、「発表が多すぎて、どこに絞ったものやら」という声もありました。メディアの傾向として、対立構造にある社会現象やシンプルな主張は取り上げられやすいことを差し引いても、担当の力不足は否めません。ISRSのブリーフィング・ペーパーの発表では、記者が来られないケースもあり、ご協力いただいた方々には誠に申し訳ありませんでした。ある全国紙がこれから連載を始めるという話も聞いているのですが、

しかし、「海国、日本」の現状を再認識させられ、今後のサンゴ礁学会の活動がなお一層活発になる必要があると感じたICRSでした。

## 会場委員会

### 会場委員会のまとめ

新垣 裕治 (名桜大学)

会場委員会では、シンポジウムの行われる会場(コンベンションセンター)での事とシンポジウム開催地であるが故に発生する様々な事に対応してきた。

参加者を空港で迎え、ホテルと前日受付会場とシンポジウム期間中のホテルから会場へと案内するシャトルバスの運行計画の検討を藤村先生と藤田先生に担当して頂いた。シンポジウム期間中のホテルと会場間のシャトルバスでは、バスに乗り切れない人もだが、増便等で上手く対処できたと聞いている。

イベント・セレモニーのアトラクションは中野さんと山城先生に担当して頂いた。シンポジウム初日のオープニングセレモニーでは、奥間国頭サバクイ保存会による国頭サバクイと人間国宝の照喜名朝一さん監修の琉球舞踊、ウエルカムレセプションでは名桜大学生によるエイサーと元世界チャンピオンの佐久本先生(現職は県立芸大教授)と3人のお弟子さんによる空手の演舞、シンポジウム3日目の公開シンポジウムの2部と3部の間の交流会では宜野湾市長田小学校130名による合唱、4日目には県立芸大の学生による琉球舞踊、いずれも参加者の目を釘付けする好評ぶりであった。ここまで仕上げるために、内部的にはいろいろと難しい局面があったようです。

ミニシンポジウムとポスターセッション

に関しては私(新垣)が主に担当した。ミニシンポジウムでは10セッションを並行して開催することになった。コンベンションセンター大きく見えて、実は、今回のように多数のミニシンポジウムを並行で行う場合は不向きであることも分かった。学会の規模にもよるが、80-90名規模の人が入れるような大きな部屋を複数確保できるように会場作りをコンベンションセンターには期待したい。ポスター会場(展示棟)では、ポスターパネルのサイズとパネルの配置の仕方、照明、展示ブースの配置等を検討した。

私(新垣)は、観光ツアーと同伴者プログラムも行った。慶良間周辺でのダイビングは大変好評で、シンポジウムのダイビングツアーだけでは対応できなかった。同伴者プログラムは南部観光と折り紙教室(講師は兼島栄子氏)を準備した。

プレス対応と広報については松田先生に担当して頂いた。ここで問題となった事は、配布してポスターとチラシがどれだけ有効に使われたかと言うことと新聞等による大会のアピールする時期だったと思う。新聞への今大会関連の記事の掲載は、私(新垣)個人的としては遅かったように感じている。

寄付と協賛に関しては、山里先生、土屋先生、小田さん(コーラルバイオテック代表取締役)に主に担当して頂いた。ここでは、寄付あるいは協賛をお願いする企業リストの検討、寄付あるいは協賛を企業へお願いする時期、主趣意書等の検討を行った。菓子類については、製菓業者から地元の菓子類を予想以上に多く頂く事ができた。従業員2名しかいないような小さな企業でも、快く協力して頂いた事にはいくら感謝しても感謝し過ぎることはない。

PCデータ受付(写真)の方法等に関し

ては、主に日高先生に担当して頂いた。ミニシンポジウムの進行予定について常に非常に神経質であった事が、データ受付のシミュレーションを行う事へと繋がった。これにより幾つかの問題点(データをCDRに焼き付けるには時間がかかりすぎる事、LANの組み方、データの整理の仕方等)が明らかになり、トラブルの少ない受付の方法やデータ運搬方法等が実現できた。

上記以外に会場委員会で検討して事としては、昼食とインターネット・ビジネスルームや要員計画がある。昼食に関しては、最初はビュフェ式の案があったが、昼食会場の広さや対応の難しさ、予算等の問題があり、最終的には弁当を出す事になった。要員計画については、3月の時点で会場委員会議題として上がり、ゴールデンウィーク前には要員募集案を確定する事ができた。要員募集はゴールデンウィーク明けに県内の各大学と専門学校へ呼びかけた。彼等のお陰で、受付作業やデータ受付等が非常にスムーズに進んだ。

以上が会場委員会で行ってきた主な作業です。これら作業を支えて頂いた、ブランドゥージャパンの方々、日本旅行の方々、沖縄コンベンション事業協同組合の玉城さん、アイレントの宮良さんに感謝致します。



## 企画運営委員の感想

## 第10回国際サンゴ礁シンポジウムの感想

高橋 啓介

(環境省自然環境局自然環境計画課)

環境省の担当者として昨年4月からICRSの企画運営委員会に関わらせていただきました。環境省としては「ICRSがサンゴ礁の保全と研究の推進に重要な役割を果たす」ということから共催という形で深く関わったわけですが、その他に、ICRIの次期事務局を引き受けることを念頭に置いて「日本サンゴ礁学会との連携を深める」、「サンゴ礁の分野における環境省の存在を国内外にアピールする」という目的がありました。そして、『日本のサンゴ礁』公開シンポジウム、ICRIセッション、沖

縄宣言等により、これらの目的は十分達成されたものと考えています。

シンポジウムは思っていた以上にスムーズに運営され終了したと思います。実行委員の皆様とブランドゥ、日本旅行の準備と努力の成果かと思えます。また、1000人規模の会合の運営に携わったこと、多くのサンゴ礁研究者の方と知り合いになれたことは、私個人としても貴重な財産になったと感じています。沖縄宣言をはじめとする第10回国際サンゴ礁シンポジウムの成果を、今後のサンゴ礁保全につなげていくために、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。

## 第10回国際サンゴ礁シンポジウムを終えて

花城 盛三 (沖縄総合事務局)

早いものでシンポジウムが終わって19日

目である。終わってほっとしたせいが大分昔のような感ずる。思い起こせば本シンポとの係わりは、平成14年の末頃からである。東京工業大学の瀬岡先生がシンポの中枢の役割を担っているのを支援するようにとの上司からの要請と、沖縄総合事務局にとってもサンゴ礁の調査研究は重要なテーマだと考えることもつかの間、那覇港防波堤周辺でのサンゴ礁群観察巡検実施の受け入れ、シンポジウムそのものの支援の決定、シンポジウムへの参画(オーラルセッション、ブース出展)とあれよあれよという間に、どっぷりと浸かってしまった。

私は元々土木技術者でありサンゴ等生物の世界については全くの素人である。語学(英語)力に乏しい上に専門用語の英単語調べと苦難の日々であったが、過ぎてしまえば良い勉強の機会であった。私の最大の成果は、今回のシンポジウムがなければ決してお会いすることが無かったであろう多くのサンゴ礁研究者との出会いである。この縁を大事にしたいと考えている。

2004年7月2日

## 危機にある世界のサンゴ礁の保全と再生に関する沖縄宣言



サンゴ礁とこれに関係する生態系は、人類のかけがえない財産である。これらは、地球でもっとも多様な生物群集と美しい水中景観を保持し、防波機能及び地域の人々への資源、漁業資源、観光資源を産み出す。しかしながら、サンゴ礁とこれに関係する生態系は、過剰な漁業、浚渫や埋立てなどの沿岸開発、陸源物質の流入によって破壊される危機にある。さらに、大気中のCO<sub>2</sub>濃度上昇による海表面温度上昇、炭酸イオン濃度減少、海面上昇は、相乗的にサンゴ礁にストレスを与え、深刻なサンゴ礁の白化や大規模なサンゴの死滅をもたらす。局所的、地域的、地球規模の環境ストレスによるサンゴ礁の劣化は、少なくともサンゴ礁の健全度と機能、価値を損ない、最悪の場合、この人類の貴重な財産の喪失につながる。

我々、第10回国際サンゴ礁シンポジウム(2004年6月28日~7月2日、沖縄、日本)参加者は、世界中でサンゴ礁の劣化がすでに危機的な段階に達

していると認識している。我々は、これ以上のサンゴ礁の破壊を避け、これ以上のサンゴ礁の死滅を防ぐために今以上の努力が必要であることを強く訴える。サンゴ礁の保全と再生は、遅滞無く、各国が個別に、そして緊密な国際的連携のもと進めて行く必要がある。そのためには、科学的研究と綿密なモニタリング、管理ツールの開発を実施し、サンゴ礁の保全と持続的な利用のための適切な対策を講じることを提言する。加えて、既に劣化してしまっているサンゴ礁に対しては、科学的根拠に基づいた再生対策を講じなければならない。

温室効果ガスを削減することにより、人為的な気候変動を抑制すると同時に、土地利用の変化や汚染による水質の悪化、漁業資源の大量採取などの直接的な脅威も減らすという両方向からの戦略をとらなければならない。この目的を達成するために次の4つの鍵となる戦略を提案する。1) 持続的なサンゴ礁漁業を達成すること、2) サ

ンゴ礁において、効果的な海洋保護区を増やすこと、3) 土地利用の変化による影響を改善すること、4) サンゴ礁再生の新たな技術を開発すること。こうした取組は、自然科学者だけでなく、社会科学者、管理者、政策策定者、NGO、市民の参加と連携のもとに進め維持しなければならない。これらの任務は、最大の研究者組織である国際サンゴ礁学会(ISRS)や国際的に管理を主導する国際サンゴ礁イニシアティブ(ICRI)、主要な国際機関(UNESCO、UNEP、IUCN等)、NGOの国際的な協力により強化していかなければならない。

我々、第10回国際サンゴ礁シンポジウム参加者は、団結して、サンゴ礁に関わるすべての研究者、管理者、利用者、サンゴ礁を愛する全ての人に対し、上述した任務を達成することを訴え、関連する国際機関、各国政府、NGOに対し、この目的達成に向けた共通の理解と手段を見出すことを強く求める。

## 編集後記

Edit postscript

今回はICRS特集です。ICRS終了後間もないのですが何とか無事発行することができました。原稿をお寄せ下さった方々、そしてレイアウトを作成してくださったM-Creationの原部さんに感謝いたします。

編集担当 山野博哉



2004年8月10日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター

Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.22 [2003/2004 No.5]

●編集・発行人/山野・波利井・中井・杉原・木村・梅澤・野崎 ●発行所/日本サンゴ礁学会

●事務局/茅根 創 &lt;kayanne@eps.s.u.-tokyo.ac.jp&gt;

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax:03-3814-6358